

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：11201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16815

研究課題名（和文）バルト・スラヴ語における動詞語形成の動的側面

研究課題名（英文）Dynamic aspects of verbal word-formation in Baltic and Slavic languages

研究代表者

堀口 大樹 (Horiguchi, Daiki)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：50724077

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はロシア語とラトビア語を例に、スラヴ語とバルト語の動詞の語形成の動的な側面を扱っている。マスメディアのテキストを題材に、動詞の文法的・語彙的アスペクトや話者の主観的な評価、借用語の動詞の接辞付加、テキストと語形成の関わり、語形成における類推の役割、新語の派生、語形成における規範と逸脱を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、語形成を単なる語の派生ではなく言語活動としての語形成と捉え、語の派生における話者の主体性や言語意識、規範との関係、コミュニケーションの場面（テキスト）の特徴などを記述し、言語の絶え間ない変化や個人差など、言語の“不安定な”側面を記述した点である。

本研究の社会的意義は、言語現象を言語の内部にとどまらず、広く人間や社会との関わりで捉えた点である。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to analyze dynamic aspect of verbal word-formation in Slavic and Baltic languages, especially Russian and Latvian. Using as mass media texts as empirical data, it shed light on grammatical and lexical verbal aspect, speakers' subjective evaluation, affixation of loaned verbs, interaction of text and word-formation, role of analogy in word-formation, derivation of neologisms, and language norms and deviations in word-formation.

研究分野：言語学

キーワード：語形成 アスペクト テキスト 接頭辞 接尾辞 新語 ロシア語 ラトビア語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

言語的な共通点の多いバルト・スラヴ諸語は、動詞の接辞(接頭辞と接尾辞)を用いた語形成が豊富である。接辞は、文法的アスペクトの対立(完了・不完了)のほか、動作の開始や終了、動作時間の長さ・長さ、動作の程度の弱さ・強さといった様々な語彙的アスペクトを示す。国内外における伝統的な語形成論では、静的な言語現象として語形成を記述するアプローチが一般的であり、派生語をすでに既成の語としてみなし、話者による語形成への関与や接辞の選択といった語形成の動的側面は注目されてこなかった。またバルト・スラヴ諸語の対照研究では通時的な対照研究がほとんどであった。

スラヴ諸語とバルト諸語ではともに接辞がアスペクトの表示を担っている。しかしながら、スラヴ諸語ではアスペクトが文法化しているのに対し、バルト諸語では文法化の程度が低く、語彙・文法カテゴリーとされている。これにより、バルト諸語のアスペクトは存在しないも同然のカテゴリーとして、その記述は疎かになってきた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、豊富な接辞を持つバルト・スラヴ諸語における動詞語形成の動的側面を、教育的な視点から個別・対照研究することである。具体的にはラトビア語やロシア語を中心に、借用語の動詞への接辞付加、出来事に対する話者の主観的な評価・感情を示す装置としての接辞付加を例に、言語活動としての語形成の動的側面を明らかにする。さらに他のバルト・スラヴ諸語とも対照させることで、より体系的・総合的なバルト・スラヴ語の語形成研究を確立させる。

#### (1) 借用語の動詞の接辞付加

借用語の動詞の接辞付加を量・質的に記述する。とりわけ生産性の高い接頭辞を中心に記述する。借用語の動詞の接辞付加は既存の動詞への接辞付加との類推によって行われると考えられる。その類推の原則がどの程度見られるのか、また既存の動詞への接辞付加には見られない、借用語の動詞への接辞付加に特徴的な語形成モデルが存在しないかを調査する。

#### (2) 主観的な評価・感情を示す装置としての接辞付加

接辞が示すアスペクトの表示が、出来事に対する話者の主観的な評価や感情を示し得ることをテキストの関わりにおいて分析する。とりわけ接辞の単独使用や非標準的な派生語といった言葉遊びの側面を記述する。

#### (3) バルト諸語のアスペクトの記述

接辞によって示されるアスペクト対立の表示のほか、統語的手段によるアスペクト表現といった周辺の現象を記述することで、バルト諸語のアスペクトを体系的に示す。スラヴ諸語との対照研究のための基礎研究とする。

### 3. 研究の方法

言語素材として、言語の変化や揺れ、創作的な側面が反映されやすい新聞や雑誌、ブログ、コメントなどを含むマスメディアのテキストを使用した。ロシア語とラトビア語のマスメディアのテキストのデータベース(それぞれ [integrumworld.com](http://integrumworld.com) および [news.lv](http://news.lv)) 及び検索エンジン Google で用例を収集し、量的・質的分析を行った。

借用語については、これまでの研究で蓄積があり、ラトビア語では約 1200 語、ロシア語では約 250 語の基動詞とこれらの動詞への各接頭辞の付加率のデータがすでに得られているため、借用語の動詞の接辞付加の研究においてはこうしたデータを最新版にした。

### 4. 研究成果

研究成果は主に以下の 5 点にまとめられる。

#### (1) 借用語の動詞の接辞付加

借用語動詞の接辞付加について、ロシア語とラトビア語を例に分析を行った。

ロシア語学ではこれまで借用語の動詞を完了化する接頭辞付加の記述は数多くなされてきた。しかし不完了化の接尾辞付加はその生産性の低さゆえに注目されず、記述もされてこなかった。そこで借用語の不完了化の接尾辞付加に着目し、不完了化の接尾辞付加の量的・質的分析を行った。借用語動詞の持つ接尾辞の種類とアクセントの位置により、不完了化の接尾辞付加が可能な場合と許容されにくい場合、またその不完了化が無接頭辞動詞の第一次不完了化なのか、語彙的修正が加わった接頭辞動詞の第二次不完了化なのか、それぞれのケースについて量的・質的分析を行った。その結果、第一次不完了化よりも、語彙的意味を変える接頭辞が付加されてできた完了体の動詞に対して行われる第二次不完了化の方が生産的に行われることを明らかにした。その際の接頭辞は、基動詞の示す動作の取り消しを示す接頭辞 *raz-* と、やり直しを示す接頭辞 *pere-* であることが多い。

接尾辞のほか、以下の 2 つの接頭辞を記述した。接頭辞 *za-* は最も付加率が高く、使用頻度の高い動詞では動詞を完了化し、使用頻度が低い動詞では過度性の意味を付与する。接頭辞 *vy-* は付加率こそ高くないが、動作の継続時間の長さを強調する特殊な構文(基動詞の反復 + *vy-* 動詞)

で主に用いられる。こういった文は借用語の動詞の音節数の多さを利用した早口言葉であることも確認された。どちらの接頭辞も、借用語動詞への接頭辞付加特有の機能を示し、借用語動詞への接頭辞付加は従来の動詞への接頭辞付加との類推により行われるという定説に一石を投じる結果が得られた。

ラトビア語の借用語動詞の研究では、基動詞と接頭辞動詞の使用頻度に注目した研究を行った。大部分の動詞では、使用頻度が“接頭辞動詞<基動詞”である動詞が多いが、その逆のパターンで、使用件数が“基動詞<接頭辞動詞”である動詞を分析した。その理由には、基動詞が古風であること、文体的に有標であることのほか、接頭辞動詞の接頭辞が語彙化していることや、特定の接頭辞と接尾辞が名詞の語基に同時に付加される接頭辞・接尾辞付加 (confixation) であることを明らかにした。

## (2) バルト諸語のアスペクト研究

スラヴ諸語とバルト諸語はともに接辞がアスペクトを示すが、スラヴ諸語ではアスペクトは文法カテゴリーであるのに対し、バルト諸語では語彙・文法カテゴリーである。

スラヴ諸語に加えてアスペクト研究が進んでいないラトビア語のアスペクトを記述研究した。ラトビア語における接頭辞動詞と「無接頭辞動詞+接頭辞に対応する副詞」構文における、接頭辞と副詞の対応関係について分析を行った。先行研究で扱われていなかった非空間的意味の抽象的な動詞を取り上げたほか、特定の接頭辞とそれに対応する副詞(とりわけ接頭辞 no-と副詞 nost)が互いに置換可能であることを明らかにすることができた。

ラトビア語の統語的なアスペクト表現については、“動詞 nemt「取る」と sedet「座っている」+un 接続詞「そして」+動詞”の構文のアスペクト的特徴を明らかにした。また時間対格と時間位格について、それぞれ不完了アスペクトと完了アスペクトの相応関係を明らかにしたと同時に、時間を示す格との結びつきは、アスペクトに中立的な動詞が文脈ではどちらのアスペクトで使われているかを判断する基準になることも示した。

本研究成果は、今後のスラヴ諸語とバルト諸語のアスペクトの対照研究の基礎となった。

## (3) 語形成とテキストの相互作用

ロシア語における語形成の言葉遊びの側面の観点から、接頭辞 pere-「過」と nedo-「不足」の組み合わせである perenedo-と nedopere-を持つ派生語の分析を行った。また接頭辞 pere-と nedo-がテキストにおいて独立した語として使用される現象について考察を行った。この背景には、これらの接頭辞が示す意味の独立性が強いこと、二音節の接頭辞として語として認識されやすいことが考えられる。また、複合語への接頭辞 nedo-の挿入という、極めて非標準的な位置への付加の可能性と、そうした派生語は言葉遊びとして用いられることから、テキストにおいて持つ強力な表現性を明らかにした。

豊富な新聞・ブログ記事のコーパスタータをもとにロシア語の借用語動詞の接頭辞付加の使用に際した書き手のメタ言語的内省も扱った。

## (4) インターネット上の語形成

現代人のコミュニケーションに欠かせないソーシャルメディアに特徴的な動詞(「シェアする」、「いいね!を押す」など)を、ロシア語とラトビア語を例に分析した。ロシア語では接頭辞 za-や接尾辞-nu-、ラトビア語では接頭辞 ie-が生産的に付加される。これらの接辞は、パソコンやスマートフォンの画面に特徴的な空間認識を反映し、どちらの言語でも完了アスペクトを示す。ロシア語の場合、アスペクトは文法カテゴリーであるため、これらの接辞はアスペクト対立の表示に積極的に寄与する。

語形成の統語的な手段であるハイフンにも着目した。近年のインターネット上で見られるロシア語の類義語の動詞をつなぐハイフンの使用を扱った。類義語の動詞をハイフンでつなぐことは、冗長ではあるものの確実に意味を伝えるための話者の努力であるが、一方で、冗長性は、意味の解釈を読み手に委ねる話者の一種の責任回避であることを結論づけた。このような意味の冗長性は、本来音声言語に特徴的な言い加えの現象に類似している。よってこうしたハイフンの使用は、音声言語による書記言語への影響を反映していると言える。ハイフンでつながれた類義語動詞が語形成の関係にある場合、同じ意味の接頭辞を持つ動詞、基動詞と接頭辞動詞、異なる接頭辞を持つ同じ基動詞、の3通りの組み合わせがある。手書きではなくキーボード

によるテキストの作成という観点も、今後の言語研究で考慮に入れるべき点である。

## (5) 借用語名詞の語形成

国際的な共同研究で、ロシア語とラトビア語の借用語名詞の合成語の派生の対照研究を行った。どちらの言語でも anti-, eks-といった要素を使った語形成がマスメディアのテキストにおいて行われている。今後は名詞の借用語の研究も視野に入れることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名	4. 巻 0
2. 論文標題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 2018.	6. 最初と最後の頁 272-276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 42
2. 論文標題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Russian Linguistics	6. 最初と最後の頁 345-356
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.1007/s11185-018-9200-1">https://doi.org/10.1007/s11185-018-9200-1</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 2
2. 論文標題 - -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Formosana . Slavica	6. 最初と最後の頁 177-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 2(4)
2. 論文標題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名	4. 巻 5
2. 論文標題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studia Rossica Gedanensia	6. 最初と最後の頁 66-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.26881/srg.2018.5.05">https://doi.org/10.26881/srg.2018.5.05</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Daiki Horiguchi	4. 巻 8
2. 論文標題 Laika akuzativa un lokativa opozicija un aspekts latviesu valoda;	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Valoda: nozime un forma 8. Valodas gramatiskais un leksiskais variativums	6. 最初と最後の頁 70-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 0
2. 論文標題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 317-324
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Daiki Horiguchi	4. 巻 7
2. 論文標題 Priedekla un adverba atbilsme konstrukcija "bezpriedekla verbs + adverbs" latviesu valoda	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Valoda: nozime un forma. Gramatika un sazina	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 -
2. 論文標題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 27-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 -
2. 論文標題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Stylistyka: mova, maulenne, tekst	6. 最初と最後の頁 306-312
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 13th Slavic Linguistic Society Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Daiki Horiguchi
2. 発表標題 Verbu desemantizesanas un to aspektualas pazimes konstrukcija "nemt/sedet un V"
3. 学会等名 54. Artura Ozola konference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Daiki Horiguchi
2. 発表標題 Imperfective suffix -yva- for the borrowed verbs in Russian
3. 学会等名 Time and Language (国際学会)
4. 発表年 2016年



1. 発表者名
2. 発表標題 " - - -"
3. 学会等名 Slavic Linguistics Society Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 : , , (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考